「鉄山の絵」　国立国会図書館デジタルコレクションより
平瀬徹斎（編）［ほか］『日本山海名物図会』巻 1、塩屋卯兵衛、寛政 9 年求板


令和 6 年度　鉄の歴史村の講演会　抄録集
発行日：令和 6 年 10 月 13 日
ポスター・表紙デザイン：アエラ地域文化デザイン室
編集・発行：公益財団法人 鉄の歴史村地域振興事業団
〒690-2801　島根県雲南市吉田町吉田 2533
TEL：0854-74-0311　FAX：0854-74-0600
http://www.tetsunorekishimura.or.jp/


火の色 里の音 人つなぐ
出雲國 たたら風土記
THE TATARA FUDOKI OF IZUMO PROVINCE

# 抄録集

# 鉄の歴史村の講演会

令和六年度

第五回 菅谷たたら山内総合文化調査報告会

十月十三日［日］

〈目次〉


ごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
本日のスケジュール・・・・・・・・・・・・・・・・・1
【基調講演】
鉄穴流しの研究最前線・・・・・・・・・・・・・・・・2
【研究報告１】
菅谷鈩の操業用具・鋤出し用具・・・・・・・・・・・5
【研究報告２】
幕末～明治期における たたら製鉄業の
　経営方針と推移・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
菅谷たたら山内 総合文化調査とは　・・・・・・・・9
総合文化調査　研究の歩み・・・・・・・・・・・・・9



（公財）
鉄の歴史村
地域振興事業団

## ● ごあいさつ

（公財）鉄の歴史村地域振興事業団
代表理事　景山　明

当財団では、平成 29（2017）年度から菅谷たたら山内の総合文化調査・研究を継続してまいりましたが、本日の講演会では令和 5（2023）年度に刊行いたしました最新の調査報告書に基づき、新たな「菅谷たたら山内像」を報告するものでございます。

本日は例年と趣向を変え、報告会の前に基調講演として、たたら製鉄に関連する分野で「鉄穴流し」に関する領域で最先端の研究をされておられます、大和大学の徳安浩明氏に基調講演をいただき、その後で、報告書の執筆者であります角田徳幸氏、鳥谷智文氏のお二人の先生から最新の総合文化調査報告書に関するご講演をいただきます。

本日の企画が、今後の菅谷たたら山内への一層の関心につながることを強く願うものでございます。

こうした鉄に関する伝統文化の継承が、地域の振興に大きく貢献することを祈念致しますと共に、今回共催、後援いただきました皆様に対しまして、哀心より感謝申し上げまして、開会のご挨拶といたします。

## ● 本日のスケジュール

令和 6 年 10 月 13 日（日）　於：雲南市吉田健康福祉センター

開　　会・・・・・・・9：45～
　代表理事　開会のあいさつ
　司会者　　開催趣旨説明

基調講演・・・・・・・9：50～
　大和大学社会学部 教授　徳安 浩明 氏
　「鉄穴流しの研究最前線」

研究報告 1・・・・・・・11：00～
　雲南市教育委員会 文化財課　課長　角田 徳幸 氏
　「菅谷鈩の操業用具・鋤出し用具」

研究報告 2・・・・・・・11：35～
　松江工業高等専門学校 人文科学科 教授　鳥谷 智文 氏
　「幕末～明治期における たたら製鉄業の経営方針と推移」

司会者　　講演会のまとめ、閉会のあいさつ
　（12：15 終了予定）

## 【基調講演】　鉄穴流しの研究最前線

大和大学 社会学部　教授　徳安（とくやす） 浩明（ひろあき） 氏

**<主な論文･著作>**

- 「地理学における鉄穴流し研究の視点」『立命館地理学』11 号、1999 年
- 「近世前期の鉄穴流しによる地形改変と耕地開発」
  安田喜憲・高橋学編『自然と人間の関係の地理学』古今書院、2017 年
- 「20 世紀中頃における島根県旧仁多町三沢地区の鉄穴流し」『大和大学
  社会学部研究紀要』3 号、2024 年

たたら製鉄の主要な原料は、花崗岩や斑れい岩、閃緑岩などの風化土にふくまれる山砂鉄である。この山砂鉄を流水によって風化土から選鉱する作業が鉄穴流しである。風化土の露天掘りをともなう鉄穴流しは、砂鉄採取跡地としての鉄穴跡地を広範囲にわたって出現させ、その一部は耕地や宅地として再利用された。本講演では、Ⅰ．鉄穴流しの技術とその変化、Ⅱ．鉄穴跡地の耕地化に関する諸問題、Ⅲ．航空レーザ測量にもとづく鉄穴跡地の新たな検出方法と鉄穴流しに関する新知見を中心に報告する。

鉄穴流しは、横方向に掘削した風化土を水送して選鉱場に導く。選鉱場は大池・中池・乙池・樋などとよばれる選鉱用水路から構成され、各水路での撹拌作業によって砂鉄を沈殿させる。このような施設をともなう鉄穴流しは中世末には行われていた、などと広く説明されてきた。しかし、講演者は、鉄穴流しには「原初型鉄穴流し」の段階から、連結させた水路を選鉱に用いる「洗い樋型鉄穴流し」へという技術変化を想定している。まず、川底から直接採取する川砂鉄の採取量を増やすために、風化土を河川に投入または掘り崩す地形改変が中世までには行われていた。中世末までに、風化土付近に水路を設置し、縦穴掘りや掘り崩しによる風化土の掘削と水送が活発化し、やがて選鉱場の位置が定まってくる。そして、遅くとも 17 世紀末までには、「樋」などとよばれる比重選鉱用水路からなる選鉱場が成立した。18 世紀前半には横方向へ掘り崩す地形改変作業が一般化する。18 世紀中頃までには、水路を連結させた選鉱場における砂鉄採取法、すなわち洗い樋型鉄穴流しが完成・普及し、山砂鉄採取の主流となったと考えている。講演者のいう洗い樋型鉄穴流しを、倉内・松尾（2020）は「連続洗い樋」とよんでいる[(1)]。

つぎに、鉄穴流しの稼業地点付近では、廃土を人為的に堆積させた「流し込み田」の存在が広く指摘されてきた。しかし、流し込み田とみなされてきた棚田の多くは、実際には鉄穴跡地内にある。その棚田の多くは、流水客土法を用いて鉄穴跡地とその付近に造成された水田として理解すべきである。鉄穴流し用の水路を介して流し込まれた客土の主体は、山林内の耕土に適した土砂であったと考えられる。

2010 年代に入ると、航空レーザ測量で捉えた詳細地形データによって鉄穴跡地の微地形が精緻に解析されはじめた。貞方ほか（2021）は、17 世紀中頃以降砂鉄採取が禁止され続けた広島県太田川流域において、赤色立体地図によって鉄穴跡地が広範に分布することを確認した[(2)]。角田（2023）は、その跡地の遺物を分析し、砂鉄採取にともなう地形改変が遅くとも室町期にはじまっていたことを明らかにした[(3)]。一方、東北地方では、北上山地南部の北上川水系砂鉄川流域における鉄穴跡地の広範な分布が、講演者によって明らかにされている。北上山地北部では、更新世段丘中の砂鉄集積層（ドバ）を採掘した跡地も確認されている[(4)]。電子国土 Web「地理院地図」の陰影起伏図を用いると、ドバの採掘跡地の分布がある程度把握できる。「切り流し」などとよばれる北上山地で行われた砂鉄の比重選鉱の中には、ドバを原料としたものもある。砂鉄採取の方法は多様であり、鉄穴流しの研究課題は山積しているのである。

**【註】**

（1）倉内勝・松尾充晶（2020）「残存遺構からみた鉄穴流しの技術体系―島根県雲南市吉田町域を素材に―」島根県古代文化センター編『たたら製鉄の成立過程（島根県古代文化センター研究論集 第 24 集）』島根県教育委員会。
（2）貞方昇ほか（2021）「太田川上流豊平高原における砂鉄採取（鉄穴流し）による地形改変について（概報）―航空レーザ測量ＤＥＭに基づく「赤色立体地図」の判読を通して―」『たたら研究』59 号、たたら研究会。
（3）角田徳幸（2023）「中国地方における中世製鉄技術の革新と特産地の形成」『群馬文化』349 号、群馬県地域文化研究協議会。
（4）吉木岳哉（2016）「岩手県久慈地域にみられる近世の砂鉄鉱層採掘に伴う人工改変地形」藤本潔ほか編著『微地形学―人と自然をつなぐ鍵―』古今書院。

**表１　中国・東北地方の史料からみた鉄穴流しの方法と施設**

| 記述時期 | 作業・施設に関する記述（抜粋） | 注 |
|---|---|---|
| 元禄４年（1691） | 鐵は山にもあり、又濱川原などに交りて鐵砂有るを砂共に取り、板に取て、石・砂をばゆり流し、鐵砂計溜、床にて吹くなり | ❶ |
| 元禄14年（1701） | 鉄砂取り様の儀、山奥より五町・拾丁或は壱里も溝ヲ堀、砂の之れ有り候処へ水ヲ掛け候て、山を堀流し、川端へ砂ヲ流し寄せ、荒砂と鉄砂と洗ひ分け候て、鑪場へ着送り申し候 | ① |
| 宝暦４年（1754） | 鉄ハ掘出したる土なぶりに水にながして鉄を取ルなりあさき流川にむしろをしきその上へほりだしたる山土をながしうちみれバ鉄ハむしろの上にとまり土ハ皆ながれ行なり | ② |
| 天明元年（1781） | 鉄を産する山ハ峯も梺も総て鉄と土と交りてある也、されど其内に分て鉄の多き所をまさと唱ふ、此所に水を流して鉄と土とを淘り分て取、是をかんなと云、農人作業の透間に此かんなを取て鑪所売る、（中略）其仕形ハ溝の内へ板を以て箱のことくにさし入れ、溝を段々に付、水上にて山を切り崩し、此溝へ流し入れ、石をはさらへを以てかき出し、赤土水の下へ流るゝを木の鍬にて水を逆に絶えずかきあくるときハ、土ハ下に流れ、かんなハ溝の底に止るをすくひ取、三斗三升を以て馬一駄の荷として鑪所へ送る | ③ |
| 天明４年（1784） | 山流し場より下の池川迄、砂の流れ落る間の谷を走りとも申す、（中略）又水の不自由なる鉄穴は、井手の頭に堤を築き、水溜池を拵て、夜の間に流れ捨る所の水をたゝへて置く也、（中略）洗ひ樋の長さ三間半、底板はつき目なし、通し板がよし。両脇の板は繼目有ても苦しからず、深さ一尺貳寸位、底幅頭の廣き所貳尺五寸、樋尻せはき所一尺六、七寸也。 | ④ |
| 寛政10年（1798） | 鉄を吹く所を銅屋と云。先づ砂鉄を取る法。水の便り有る山の中腹に溝を堀り、是に流を入て、頻りに穿鑿し土砂の先流れて砂鉄は沈み滞る。是を取て能々土砂を洗ひ去る事なり。 | ❷ |
| 文政３年（1820） | 「鉄口」の項：「磨場所池、幅二尺　長さ上壱番五間　中弐番四間　下三番三間」「磨船　幅壱尺五寸長さ壱丈三尺　外に頭に横座板弐尺　うすくてもよし」 | ❸ |
| 文政８年（1825） | 金銀鉱とは違ひ、深穴には、生せず、多く岡阜に生ず、故に深く穴ほるに及ばず、昔は土鉄を採り、水際に持出て淘洗し、故に其鉄を採りしあと、穴にもなりしより、鉄穴と名づけたるも、今は山を虧崩し、水を引て流しくる故に、穴にはならず、かく便宜にはなりたれど、岡も平地とかはる処もあり、（中略）採鉄の法、まづ其山へ水手をつけ置て、山を掘るべし、水力にて、砂鉄を流し出す。流し口より、下に大池、中池、乙池の三所を兼ねてまうく、泥水は浮き流れて、砂と鉄と、相交るもの底に留るを、大池より次第に洗ひ流して、乙池にて製す | ⑤ |
| 文政10年（1827） | 凡そ鉄を採るには、鐵砂の多き山の下にて流河のある所を撰び、其山の土砂を其流河に崩し入れ、急流にて洗うときは、土は皆流れ去りて、鉄砂のみ水底に遺る者なり、其殘りたる鐵砂を笊籬を以て抄採り、流水に投じて二三遍も淘汰し洗ひ浄めて、而して此を蓆嚢の類に入れ、此を鞴場に積聚めて、以て鼓鞴る用に供ふるなり | ❹ |
| 嘉永７年（1854） | 鉄砂のある所ヲ見るに、その邊白き砂にて、眼に鉄砂なる事見得されとも、是を流れ水に入れ、其加減を取て樋に流し時ハ、自然鉄砂ハ沈ミて、只の白き砂之分ハ流れる也。（中略）切流しを懸たる水、田に入れハ稲の為よろしからざる為、用水になるべき澤等へハ、其所田地の差支ヲいふて鉄砂を掘らせぬと也。 | ❺ |
| 1845年ごろの見聞を後述 | 砂鐵のある場所より遥かの川上高き所に堰を設け、鐵山の半腹に溝を鑿ち之れに上記の堰止めたる水を數里若しくは數丁の所より導きて、其水力に依りて山を洗ひ流す時は、其水泥と混和して其量を増し、水力益々加はりて山の裳を拂ひ、東京愛宕山の如きすら數十日間に形を失はしむに至るべし。而して下流穏かなる場所を撰擇して更に一の堰を構へ、番人その水上を鞭ち砂鐵の沈殿溜たまるに従ひて堰を高くす。然る時土は泥と爲りて堰を越へて流下し、砂鐵は堰の爲めに遮られて降沈す。 | ❻ |
| 年不詳<br>天明７年? | 山ニ而洗砂ハ川上、土を能々洗な可して松葉ニ而土をとめわ土（上土）のにこりを去りて砂を洗なり。 | ❼ |
| 年不詳 | 鉄を堀候所を鉄穴と申し候、其堀候土を流れにて洗ひ候へば砂之如く成鉄に成申し候、是を粉鉄と申し候、此洗ひ様ハ鉄穴所へかゝり候様ニ出泉・谷水之流れを付、三段に池を堀、初を大池、二ヲ中池、三ヲ乙池と申し候、此乙池之脇に箱樋を居清メ場を外ニ構へ申し候、是如く仕懸ケ鉄穴を堀候へハ、土ハ流れ捨り粉鉄斗り右三段之池ニ残リ申し候を、清メ場へ移し洗ひ流し候へハ、土気よく去り全く鉄粉ニ成申し候を取り揚げ候て、よく乾し追々鑪所へ送り申し候 | ⑥ |

洗い樋型鉄穴流しの説明と異なると判断した部分には、下線を施してある。

注①～⑥＝中国地方の史料　①千草屋源右衛門（1653-1702）「播州宍粟郡鉄山請負御用留」、（ひょうご歴史研究室紀要別冊 2020 47 所収）。②平瀬徹斎撰・長谷川光信画（1754）『日本山海名物図絵』、（名著刊行会 1969年複製 46-47 所収）。③岡眠山（1781）『陶鉄図』、（東城町史編纂委員会編 1991 50 所収）。④下原重仲（1784）、（宮本ほか編 1970 557-558 所収）。⑤頼杏坪編著（1825）『芸藩通志』、（東城町史編纂委員会編 1991 56 所収）。⑥不明『学己集・第二巻』、（東城町史編纂委員会編 1991 15 所収）。

注❶～❼＝東北地方の鉄穴流しを記述したとみられる史料　❶黒澤元重（1691）『鉱山至宝要録』、（三枝博音編 1978 『復刻・日本科学古典全書5』朝日新聞社 101 所収）。❷里見藤右衛門（1798）『封内土産考』、（鈴木省三編 1923 『仙台叢書・第三巻』仙台叢書刊行会 434 所収）。❸早野貫平（1820）『萬帳』、（渡辺信夫・荻慎一郎・築島順公編 1985 陸中国下閉伊郡岩泉村早野家文書（上） 東北大学日本文化研究所研究報告別巻 22 144-145 所収）。❹佐藤信淵（1827）『経済要録』、（瀧本誠一編 1992 『復刻版・佐藤信淵家学全集・上巻』岩波書店 731 所収）。❺平船圭子校訂（1988）『三閉伊日記』岩手古文書学会 3 所収。❻大野太衛編（1908）『高島翁言行録』東京堂 30-31 所収。❼不明『製鉄法秘書』、（金属博物館編 1980 『宮城県関係近世製鉄史料集Ⅱ』同館 14 所収）。



**表２　原初型鉄穴流しと洗い樋型鉄穴流し**

| | | 原初型鉄穴流し（18世紀中頃まで主流） | 洗い樋型鉄穴流し（18世紀後半以降の主流） |
|---|---|---|---|
| 地形改変 | 方向 | 縦穴掘り（上から下へ） | 横への掘り崩し |
| | 風化土の運搬 | 人力 | 水力・重力 |
| | 対象となる地形 | 山麓緩斜面・支尾根の頂部など | 山麓・山腹・山頂緩斜面など |
| | 規模 | 小さい（せまく浅い） | 大きい（ひろく深い） |
| | 跡地の特色 | 小凹地、狭長な凹地 | 切羽跡、ホネ、鉄穴残丘の組みあわせ |
| 諸施設の状況 | 走り（宇戸） | 自然の小河川 | 人工水路・自然の小河川 |
| | 比重選鉱の水源 | 自然の小河川 | 人工水路・自然の小河川 |
| | 比重選鉱の設備 | 川底・筵・簡便な樋など | 連結した水路からなる洗い樋 |
| 下流域への影響 | 平野の拡大 | 関与小 | 関与大 |
| | 濁水紛争の発生 | 少ない | 多い |
| 社会経済的側面 | 所有と経営 | 「半農半鉱」的な村方の住民？ | 村方の住民（個人・寄合）、鉄山経営者、藩など |
| | 労働 | | 専業的技術者、農間稼ぎとする村方の住民（出稼ぎあり） |
| 土地開発との関係 | 跡地利用の様子 | 切添い的な開発に適する。近世前期には活発に耕地化された。 | 耕地化される割合は低いが、集落形成をともなう大規模開発もありうる。 |
| | 流し込み田 | 稼業地点付近の廃土の堆積地に造成可能 | 廃土の堆積地に造成されることはあまりない。 |

注：縦の太線は、地形改変が縦穴掘りから横への掘り崩しに移行した段階を示している。

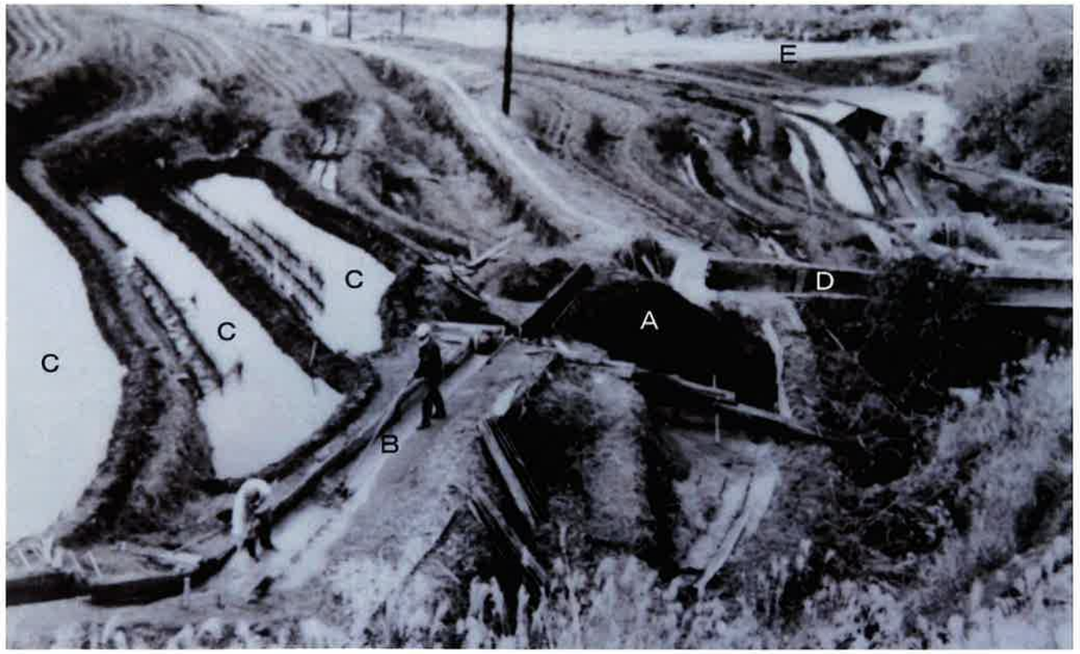


**写真１　島根県旧仁多町三沢の雑家第１選鉱場**（1950年前後）

Ａ：砂鉄置き場　Ｂ：選鉱用水路（砂鉄置き場に近接しているので樋または乙池であるとみられる。）
Ｃ：田堤　Ｄ：水力発電用水路　Ｅ：斐伊川沿いの国道
（プロテリアル安来製作所鳥上木炭銑工場提供）

# 【研究報告1】菅谷鈩の操業用具・鈩出し用具

雲南市教育委員会 文化財課 課長　角田（かくだ） 徳幸（のりゆき） 氏

**＜主な論文・著作＞**

・『たたら吹製鉄の成立と展開』清文堂出版、2014 年
・『たたら製鉄の歴史』吉川弘文館、2019 年
・『たたらの実像をさぐる　山陰の製鉄遺跡』新泉社、2022 年

菅谷鈩製鉄用具は、1968 年（昭和 43）に島根県教育委員会が刊行した『菅谷鑪』に 141 点の記載がある。これらは、同年に島根県指定有形民俗文化財となったが、現存する製鉄用具は 200 点近くあり、すべてが報告され指定を受けたわけではなかった。菅谷鈩の操業状況を明らかにするには未報告資料も含めた考察が必要であり、3 年前から調査を行ってきた[1]。今回は、前回の製鉄炉構築用具に続いて、操業用具と鈩出し用具を報告する。

菅谷鈩の製鉄用具には①1923 年（大正 12）に操業を終えるまでのもの、②1939・40 年（昭和 14・15）の出雲製鋼操業時のもの、③1969 年（昭和 44）の日本鉄鋼協会による復原実験に伴うものがある。大別すれば、田部家による操業が終了した 1923 年以前のものと、出雲製鋼が操業を再開した 1939 年以後のものということになろう。

『菅谷鑪』では、製鉄用具の製作年代は、ほとんどが不明とされる[2]。報告書の一覧には合わせて「同種のものの使用年代」という欄があり、すべて「大正 12 年閉山まで」ともする。こうした記載から、製鉄用具は田部家による経営が終了するまでのものという印象があった。今回の調査では、操業用具・鈩出し用具の製作年代について、素材となった鉄材が和鉄なのか洋鉄なのか、部材の接合に使われる釘が和釘か洋釘かなどの観点から検討した。田部家は 1923 年に大鍛冶屋の操業を終えており、それ以降、用具の材料となる庖丁鉄（和鉄）を生産していない。したがって、1939 年の出雲製鋼操業時は、その材料に市販の洋鉄を使わざるを得なかったとみられるからである。こうした検討の結果、操業用具・鈩出し用具の主体を占めるのは、田部家経営期のものではなく、出雲製鋼期のものであることが明らかになった。出雲製鋼は、2 年間で 23 回操業したことが知られており、断続的な操業ではあったが、田部家が鈩を廃業した後に失われた用具を補ったり、操業中に傷んだ用具を更新したりしたようである。

菅谷鈩の操業用具・鈩出し用具は、江戸時代から操業を続けてきた田部家の経営が終了した後、出雲製鋼が操業を再開する際にどのような形で必要な用具を調えたのかを窺わせるものであった。第 2 次世界大戦期に島根県では多くの鈩で復活操業が行われており、その際の対応を生産用具から示す事例として、新たな意義を見出すことができる。結果的に、田部家経営期の用具は少ないことが明らかになったが、これらが菅谷鈩における操業の実態を直接示す資料であることに変わりはない。

**【註】**

（1）角田徳幸（2022）「菅谷鈩の製鉄用具 1」『菅谷たたら山内総合文化調査報告書』3、鉄の歴史村地域振興事業団。
　　角田徳幸（2023）「菅谷鈩の製鉄用具 2」『菅谷たたら山内総合文化調査報告書』4、鉄の歴史村地域振興事業団。
　　角田徳幸（2024）「菅谷鈩の製鉄用具 3」『菅谷たたら山内総合文化調査報告書』5、鉄の歴史村地域振興事業団。
（2）岡　義重・勝部正郊（1968）「民具」『菅谷鑪』島根県教育委員会。

**菅谷鈩操業用具・鈩出し用具**

**種すき**（左上）砂鉄を炉内に入れる用具、**小手ほど**（右上）送風孔に付着した鉄滓を除去する用具、**湯はね**（右中）炉底に挿入し鉄滓を流し出す用具、**はんがけ**（左下）鈩出しの際炉を壊す用具、**釜えぶり**（右下）鈩の上に残った炭などを取り除く用具

# 【研究報告2】幕末～明治期における たたら製鉄業の経営方針と推移

松江工業高等専門学校 人文科学科 教授　鳥谷（とや）　智文（ともふみ） 氏

**＜主な論文・著作＞**

・角田徳幸、鳥谷智文、木本泰二郎、武藤美穂子、引野道生
『雲南のたたら文化』雲南市たたらプロジェクト会議、2022 年
・「第３回・第４回内国勧業博覧会関係史料からみた乃木村の産物―製紙業を中心に―」『松江市史研究』13 号（『松江市歴史叢書』15）、2022 年
・「幕末・明治期における鉄師からみたたたら製鉄の経営動向」『鉄の技術と歴史研究フォーラム第 41 回フォーラム講演会論文集』2023 年

幕末～明治期におけるたたら製鉄業の経営に関する推移については、これまで渡辺ともみ氏、野原建一氏などにより絲原家文書などを利用しながら、海軍需要を中心に分析がなされている[1]。

田部家についていえば、相良英輔氏、中山富広氏による田部家の経営動向についての分析が注目される[2]。

それらの研究を背景として、近年テキストという枠組みではあるが、『雲南のたたら文化』において新たな史料分析をふまえてたたら製鉄業経営が概観された[3]。

しかし、鉄師（たたら製鉄業経営者）によるたたら製鉄業の経営動向については、未公開の史料が多く、検討の余地を多分に残している。本報告では、幕末～明治期における田部家の経営を中心に据え、景気の動向を注視しつつ史料からみえる同家のたたら製鉄業における推移の一端を、経営方針とともに指摘する。

幕末における田部家のたたら製鉄業経営は、「忠節規範鑑」[4] によると、当主のみならず、当主を支える手代の勤勉な仕事により事業の維持がなされていく。このあり方はその後も続き、当主と手代は、地租改正などの明治期の大きな政策転換、気候不順による不作、戦争などによる景気変動などに対応していった。その多様な経営展開、事業の存続、発展の様相を、「元治二年旧記」[5]、「明治三十一年旧記」[6] などに記載されている史料を読み解き、たたら製鉄業を中心に紹介する。

また、田部家の経営は、たたら製鉄業以外に、山林、田畑、輸送、貸家、温泉など様々な経営により成り立っており、この点も留意しつつ特徴を述べたい。

**【註】**

（1）渡辺ともみ『たたら製鉄の近代史』吉川弘文館、pp. 1-308、2006 年、野原建一『たたら製鉄業史の研究』溪水社、pp. 1-227、2008 年。
（2）相良英輔「田部家の由来とたたら製鉄業の展開」同編著『松江藩鉄師頭取田部家の研究』島根大学、pp. 1-34、2009 年、同「（序）田部家たたら製鉄史の概要」『田部家のたたら研究と文書目録―田部家文書調査報告書―（上）』島根県雲南市教育委員会、pp. 1-7、2012 年、中山富広「在来産業たたら製鉄の衰退とその歴史的意義―出雲・田部家「鉄業創始以来営業状態概略」を手がかりとして―」勝部眞人編『近代東アジア社会における外来と在来』清文堂、pp. 5-24、2011 年。
（3）雲南市たたら文化伝道師認定制度検定マニュアル編集委員会編、雲南市たたらプロジェクト会議、pp1-85、2022 年。
（4）田部家文書、右上後 3-2-4。
（5）田部家文書、右下 3-84。
（6）田部家文書、中 32-1-1。



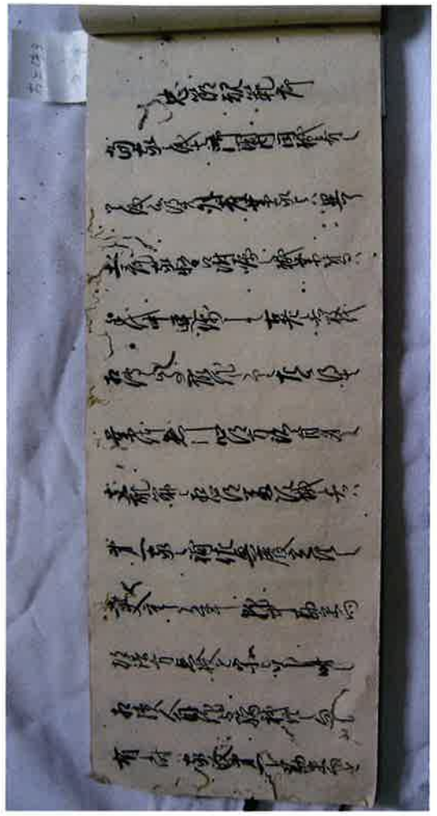

図２　「忠節規範序」（前掲図１「忠節規範鑑」）

図１　「忠節規範鑑」表紙（田部家文書、右上後 3-2-4）

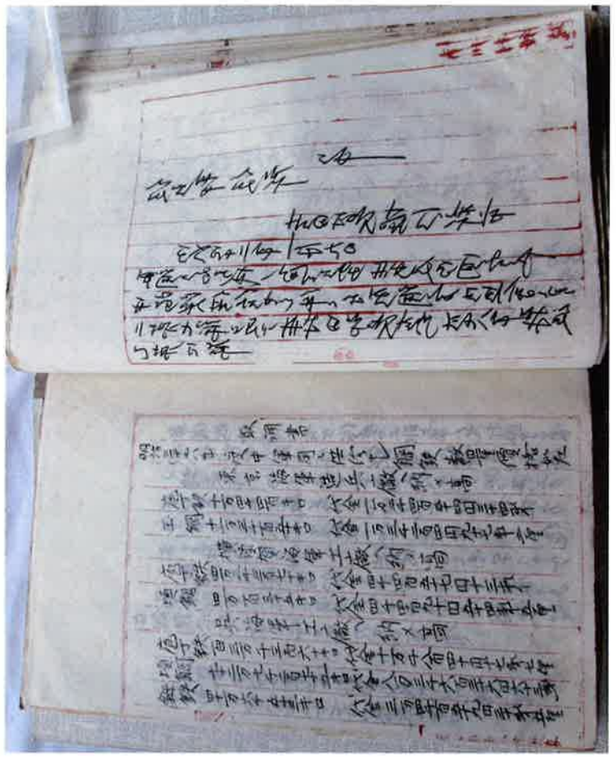

図４　「取調書」（「田部家履歴明治三二年～大正五年調査報告」鉄の歴史博物館所蔵文書、A-1-101）

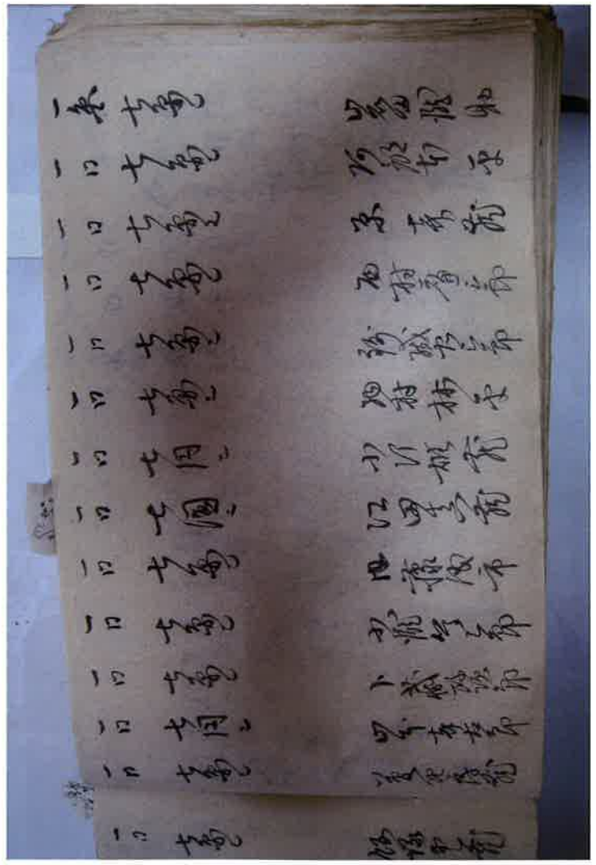

図３　「（山地券尽力につき手代中心附書上）」（「元治二年旧記」田部家文書、右下 3-84）

## ● 菅谷たたら山内 総合文化調査とは

菅谷たたら山内の総合的な調査による成果物は、昭和43（1968）年3月刊行の『菅谷鑪』に始まります。歴史学・民俗学・建築学の研究者が中心となり、住民の聞き取り調査、史料調査、建造物や製鉄道具などの調査をとおして、菅谷たたら山内に関する基礎資料が集成されました。

その後、昭和61（1986）年11月に財団で開催した第1回シンポジウム「人間と鉄」以来、多くの研究者の方々のお力添えにより、幣財団は様々な切り口による調査研究を継続してきました。

平成29年度より雲南市教育委員会から菅谷たたら山内活用事業補助金の助成を受け、昭和43年の調査では調査しきれなかった史資料の発掘を行っており、毎年度その研究成果のまとめとして『菅谷たたら山内総合文化調査報告書』を発行し、今日に至っています。

## ● 総合文化調査 研究の歩み

『菅谷たたら山内総合文化調査報告書』に掲載された論文等は以下のとおりです。

### 【報告書1】令和2(2020)年3月刊行（令和元(2019)年度 研究成果報告）

第1部　菅谷たたら山内と関連施設の空間的特徴

論　　文：菅谷鈩山内の施設　角田　徳幸
論　　文：菅谷たたら山内の建物の特徴について　木本泰二郎
論　　文：菅谷たたらに於いて水力送風の意味するところ　小池浩一郎
論　　文：菅谷たたら山内を支えた牧野　大津　裕貴
論　　文：職能集落としての「菅谷たたら山内」とその居住空間　武藤美穂子

第2部　菅谷たたら山内にみる人々のくらし

聞取調査：昭和における菅谷たたら山内に対する認識　小原　清
聞取調査：菅谷たたら山内の生活誌　鈴木　昂太
　　―昭和2、30年代を中心に―
論　　文：五人組規約・矯風規約にみえる人々の暮らし　鳥谷　智文
　　―出雲地域と石見地域山間部の比較検討―

### 【報告書2】令和3(2021)年3月刊行（令和2(2020)年度 研究成果報告）

論　　文：八重滝鈩における水力送風技術の導入　鳥谷　智文
論　　文：「菅谷たたら山内」における長屋の考察　武藤美穂子
聞取調査：菅谷たたら山内の女性たち（1）　峠理恵・鳥谷智文
聞取調査：菅谷たたら山内における昭和期の操業と生活　鈴木　昂太
　　―湯村健吉氏からの聞き取り―
史料紹介：益田市指定文化財津島家文書「金屋子神秘禄傳 全」の解題と翻刻
　　小原　清



### 【報告書3】令和4(2022)年3月刊行（令和3(2021)年度 研究成果報告）

論　　文：菅谷たたら山内の「女人禁制」　武藤美穂子
論　　文：明治20年代後半における田部家経営鈩の操業状況　鳥谷　智文
資料紹介：菅谷鈩の製鉄用具1　角田　徳幸
資料紹介：八重滝鈩金屋子神社の奉納品について　高橋　誠二
資料紹介：雲南市吉田町杉戸地区三浦家文書・道具目録　鈴木　昂太
聞取調査：菅谷たたら山内の女性たち（2）　小原　清

### 【報告書4】令和5(2023)年3月刊行（令和4(2022)年度 研究成果報告）

論　　文：明治中・後期における田部家生産鉄の商標について　鳥谷　智文
論　　文：在村医のオランダ医学修得について　梶谷　光弘
　　―松江藩飯石郡吉田村の常松謙斎（六代）を事例として―
資料紹介：菅谷鈩の製鉄用具2　角田　徳幸
資料紹介：菅谷たたら山内「山内祠」の奉納品について　高橋　誠二
技術報告：近代たたら操業で得られた鋼塊の組織観察　新野邊幸市

### 【報告書5】令和6(2024)年3月刊行（令和5(2023)年度 研究成果報告）

論　　文：幕末～明治期におけるたたら製鉄業の経営方針と推移　鳥谷　智文
資料紹介：菅谷鈩の製鉄用具3　角田　徳幸
資料紹介：菅谷たたら山内周辺の石造物～一畑薬師の石造物～　高橋　誠二
資料紹介：再考　菅谷たたら山内生活用具　岩城こよみ
技術報告：近代たたら操業で得られた鋼塊内部のミクロ組織　新野邊幸市